浜松
南高新聞

発行所
県立浜松南高校新聞部
静岡県浜松市米津町
印刷
浜松共同印刷株式会社

# 将来への覚悟新たに

## 多くの来賓招き式典挙行

### 新芽を出すか樹木＝南高

昭和三十八年開校以来十年の歳月を経た浜松南高等学校。

この十年間の南高の発展を祝って、去る十一月二日本校体育館において「十周年記念式典」が行なわれた。

また、十周年記念の一つとして植樹も今年度初めから行なわれてきたが、この十周年記念式典を前に、九月中にはすべて完了した。

植樹は、生徒会がグランド東側にクスノキを、後援会がグランド西側にクスノキ、マテバシイ・サザンカを。そして同窓会は体育館西側にユリノキ、格技場南側にマテバシイをそれぞれ寄贈した。

このような木々が、秋の陽ざしを浴び始めた頃、多くの来賓を招いた十周年記念式典が始められた。

さすがに十周年ということばの重みからか、生徒入場は話し声もなく、敏速にできたようだ。

そして九時四十五分来賓入場。

続いて本校音楽科担任渡瀬祥光先生の作曲による「式典前奏曲」が吹奏楽部によって演奏された。この曲は渡瀬先生がこの日のためにわざわざ作曲されたもので、伸び伸びとした明るさと力強さを感じさせた。

こうして、十時十分開式のことばが述べられ、出席者全員で「君が代」を斉唱し、式典が始まった。

最初に野口大[illegible]学校長から、この十年を振り返りそして次への発展に努めよう、と式辞があった。

学校長十周年の喜びと新たな豊富を語る

次に開校当時南高の教頭であった児玉一郎氏が、県教育長代理として創立当時の苦労話しを兼ねて祝辞を述べられた。

その後、平山博三浜松市長、地元出身の県会議員和久田好造氏から、十余年前学校誘致運動が起こってからどのようにしてこの南高校ができたのか、また学校誘致の際の苦労話しなどについてのお話しがあった。

そして、県高等学校長協会会長式守富司氏の祝辞の後、初代校長湯山孝氏が演壇に立たれ、十年前の南高と、現在の南高とを比較して、なつかしそうにいろいろなお話しをなさった。

その後、PTA・後援会長の久野幸夫氏、一期生の同窓会長栗山佳三さんのお話しと続いた。

こうした来賓方々の祝辞に答えて生徒代表の鈴木幸次君がお礼のことばを述べた。

そして、全校生徒で「南高校歌」を斉唱し、十二時前十周年記念式典を無事終えた。

こうして、当初先生方がいだいておられた「生徒が二時間もの間静かにしていられるだろうか」という心配も何ら問題はなかった。

県内でもいくつかの学校が創立十周年を迎え、記念式典を行なったという。

そのような中で、浜松南高等学校の記念式典は成功したと言っていいだろう。

今年の夏に植樹した南館南側のクスノキは新しい芽を出し始めている。十周年を迎えた南高も今樹令十年の木となったのである。そして、より大きく未来に伸びるために芽を、根を、育てるよう努力していくべきである。

県教育委員長代理・初代教頭の児玉氏

メガネの
吉田屋
浜松駅前広小路
53−1188代
浜松郵便局前
浜交ビル 54−0181代

先月行なわれた「昭和47年度静岡県学校新聞コンクール」において、浜松南高新聞部が三位に入賞した。このコンクールは、静岡新聞社の主催で毎年行なわれているもので、浜南新聞としては18号、23号に次いで三度目の三位入賞である。

**論説**

## 自分の力を出し尽くせ

現在私達は三年間の高校生活を過ごしている。長い人生の中で高校生活はほんの一片にすぎないが、それの持つ意義は大変に大きい。人間として重要な人格、人柄等が形成されるのもこの時期である。この様な時期を現在過ごしている私達は、あまりにその重要性を無視している。その現われが私達の毎日の生活である。毎日同じ時間に登校し同じ時間に下校する。その上に学校での生活も一定の時間割によって、毎日をまるで機械の様に動いている。これではあまりに人間としての生活内容が乏しい。この事は多くの者が痛感している事であり、中には反抗を試みる者もいる。しかし反抗をする者も現在のすさんだ生活を打破しようとするのではなく、単に面白くない学校生活を憂晴らしをする事によって気を紛らわそうとする考えの者が多い。その様なヤリ方では、一時的な不満の解消になるかもしれないが、決して真の不満解消にはならない。

高校生活を有意義に過ごそうと思うのならば、まず一つには何かに自分の持つ力のすべてを出し尽くしてみる事である。たとえそれが勉強とかクラブ活動等の様に直接学校生活と関係のない趣味やスポーツ等でも構わない。それによって何らかの道を見つけ出せるはずである。また一つには、冷静に自分の行動・考えを見つめ、反省し、改善して、徐々に自分の理想とする生活に近づけて行くことである。しかしこのためにはすぐれた人間性、知性、思考力、精神力、行動力等の持ち主でなくてはならない。私達の中で高校生活を有意義に過ごしたいと思っている者は多い。しかしそのために努力し、行動している者は少ないと言わざるをえない。

中には高校生活を見捨ててしまい、何もせずに高校生活を終わる者もいる。だがその様な者も心の奥では有意義に過ごしたいと思っている。またそう出来る力も持っている。それなのになぜそうならないのか、それはその者がそのために努力しようとしないからである。ある目標がある者はそれに向かって真直に進めばよい。無い者は現在自分の置かれている状態に対して全力を出してぶつかって行けばよい。そうする事によって何かをつかむ事が出来るはずである。

ある一面では高校生活は過保護だとも言える。何をしても最終的には親や学校に責任が掛かり、社会でも高校生だからと言って多くの点で大目に見てくれる。多くの者は親のすねをかじり、自分勝手な事ばかりをしている。それでいても高校生という看板によって、私達は保護されている。私達はこの様な状態にばかり頼っていずに、むしろそれを良い意味で利用し、私達の年代にしか出来ない事をしなくてはならない。

高校生活を有意義に過ごす事は、青春を有意義に過ごす事にも通じる。現在の私達にとって青春の問題は非常に重要な位置を占めている。すでに青春を過ごしていると感じている者もいれば、まだ感じていない者もいる。中には大学に入ってからが自分の青春となるなどと言う者もいる。だがほとんどの者はすでに青春の日々を送っている。私達は青春時代を見逃がしてはならない。青春とは一生に一度しか来ないのである。その時期には私達は多くの事を考え、行動する事ができる。他人に迷惑を掛けず、自分で責任を取れる範囲ならば自分のやりたい事が何でも行なえる。それが青春に与えられた特権なのである。それを生かすことが出来るかどうかによって、その人の青春が定まってしまう。とかく恵まれた環境の中に埋れて、結局は努力もせずに青春を見逃がしてしまう。そんな人の多い現在、それをただ指をくわえて見ていてはいけない。私達に与えられた特権と自分の身心をフルに活用して、考え、行動しなくてはいけない。それが出来るのは現在をおいて他にはないのである。またそれによって悪い結果が出ようと今の私達にはそれが許される。私達は決して現状に満足してはいけない。自分自身を反省し、進歩、発展させなくてはいけない。

## 新期生徒会発足

### 選挙のあり方考えよう

四十七年度後期生徒会が、十月十四日の引き継ぎ式をすませて、正式に発足した。

今回の選挙は、立候補者が会長副会長とも一名ずつで、定員に満たなかったため、あとの一名を代議員会が推薦した。そして、九月十四日その三名についての信任投票が行なわれ三名とも信認された。

鈴木新会長は、抱負を次のように語っている。

「生徒会が発足すると、マンネリ化した生徒集会のことがいわれる。これについては、議題の事前公表を徹底し、さらにフォークソング、フォークダンスをとり入れ内容にうるおいをもたせる。

次に、前期では不定期に行なわれてきたフォークダンスを、週二回昼休み、月一回放課後にと、定期的に行なうようにしたい。

新しい活動としては、募金活動をする。これは施設への寄附が目的で、実際的には学校各所にあゆみの箱（募金箱）を設置する。

最後に、生徒会への無関心は、生徒一人一人が生徒会活動を知ることが必要なので、活動内容を刷ったものを配るとか、潮騒を使ったりして生徒の関心を得たい。」

四十七年度後期生徒会役員は次のとおりである。

会長　鈴木幸次(23)
副〃　飯田祐子(25)・渥美　清(21)
書記　磯部朋子(27)・松下真也(13)
〃　加藤京子(18)
会計　大木恵子(26)・武田和子(27)
〃　窪野高徳(14)
生活　影山純市(23)
文化　佐々木伸一(22)
保健　伊熊圭子(25)
体育　太田文雄(21)

鈴木会長・飯田，渥美副会長

今回の選挙では、対立候補がいなかったため、立合演説会以外の選挙活動はほとんど行なわれなかった。これについて、どうでもいいとみている人が多いようである。しかし、本当にそれでいいのだろうか。また候補者からは、公約らしいものが出されなかった。それにもかかわらず得票数が高かったのはなぜか。また立会演説会以前に候補者を知る機会が必要ではなかっただろうか。これらの問題を含めた意見が、今回もさかんな野次となって飛んだ。この野次について生徒にきいてみると「立合演説会の他に候補者と接する機会をつくっても、候補者が公約を出したとしても、技術的に限界があって、どこかでけじめをつけねばならない」という答えが返ってきた。これらは生徒会員で考えてみるべき問題であろう。

後期は、行事等もあまりなく自由もきくので、活発で独創的な活動が期待される。新生徒会の活躍に期待するとともに、生徒会員でバックアップしていこうではないか。

## 人気呼ぶ仮装行列

### 二年ぶりに大会開かる

十月五日、本校グランドにおいて第八回校内体育大会が開催された。生徒会長の開会宣言のあと学校長のあいさつ、会長の選手宣誓、全員によるラジオ体操が行なわれた。

午前九時すぎ百メートル予選をトップとして次々と各競技が繰り広げられた。中に砲丸投げや走り幅とび、高とびなども含まれており、それぞれの位置で奮闘している生徒の姿も見受けられた。一年男女の高校生体操では構成の良さとリズミカルな動きに、好評を得たようである。二年男子組立体操は、困難である組立構成もなんなく決めて惜しみない拍手が送られていた。二・三年女子による民踊はさすがに情緒があった。浴衣の君は[illegible]年のかんざし……色っぽいねとかいう声も——。昼休みを利用して行なわれた仮装行列では、三年生が多種多様の衣装に身を包み応援席に笑いをふりまいてグランドを一周した。化粧した男子が近づくと悲鳴をあげ逃げまどう女子生徒も出て楽しいひとときであった。男子の女装について感想を聞くと、ゴールデンハーフが良かった、気持ち悪いとのことである。

午後からは各種目の決勝が行なわれHRに良かれと頑張る選手や応援する生徒のためグランドは増々、熱気を帯びてきた。そうした中で始まった男子千五百メートルリレー決勝は先生方の参加もあり応援席では、しばし黄色い声援が飛んでいたようである。

各種目も無事終了し続いて閉会式、生徒会本部からの成績発表があった。結果は次のとおりである。

優勝　23HR　16HR
二位　35HR　18HR
三位　32HR　26HR

なお今年は企画運営の中心が体育科に移り体育行事としての効果がみられたが、やや「記録会」的になり、レクリエーション種目との調整が今後に残された。

## 先生の高校生時代

### 悪友とイッパイ！

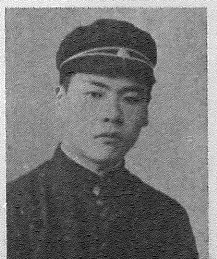
昭和二十一年四月旧制中学四年修了し高校に入学した。その時の印象があまりにも印象的であった。およそ[illegible]とは言えない古い木造の暗い教室の雰囲気に、身が引きしまる思いがした。次々に展開される授業に私はひどく緊張した。難しい数学や英文に夜まで苦しめられる運命との出会いはこの時に始まっていたのかも知れない。

勉強の重苦しい息苦しさの中で、私はそっと図書館に通うようになった。広い図書館の静寂さは、私には不似合いな感じがあったが、私はそこで小説等を読むことで自分の存在を確かめることができたような感じがした。その頃親しくなったT君やI君の影響によって、当時二一[illegible]」という雑誌を出していた文芸部に入り、詩や創作らしきものを書いた。学年が進み、新校舎に移り、多くの友人を得た中で、特に楽しかったのは休講の時間であった。先生が休まれたその授業は、完全に自由であった。多くは屋上に出て弁当をひろげたり、図書館で自習したりしたが、中には帰る者もあった。

そろそろ進路について真剣に考えねばならなくなった頃、国語の授業をM先生に受けるようになった。その先生の話される万葉や源氏の講義に私は陶然とした。それまでは漠然と教師になることにあこがれていた私は心の奥[illegible]人に語られないように、ひそかに国語の教師になることを決意した。講義の一言一句にひき込まれるような感激を覚え、私は国語の勉強にだけ熱中した。人生にいくつかの大切な出会いがあるとすれば、これが私だけの心の出会いであったと今になって思われる。

当時はまだあった軽便電車での通学、一週間通った弁天での水泳訓練、友人の家へ遊びに行き一晩中酒を飲んで騒いだこと……。いろんな思い出が断片的に頭をかすめるが、今はもう再びくり返すことのできない生活だから、余計に三年間がかけがえのないもののように思われる。

忘れ去るが故に美しいのが思い出だから、私の記憶も幻想の中に多分に美化されているのかも知れないと思ったりもする。（内山眞一）



紅顔の美少年内山先生

## 軽快な生の音楽

### 芸術鑑賞教室開かる

第一回芸術鑑賞教室が十一月二日、本校体育館において開かれた。今回は創立十周年記念式典のあとに行なわれるということで、「東京ミュージカル・アカデミー」を招待した。

[illegible]る。[illegible]同[illegible]の[illegible]めそれぞれをもみ[illegible]く楽しい芸術[illegible]ル・アカデミ[illegible]スを聞かせて[illegible]軽快な動きを[illegible]充分に含んだ[illegible]名である。また、彼らのミュージカルは、脇役としても重要な位置にある。特に女性歌手のリサイタルには男性合唱の良さを聞かせ、あの力強さとハーモニーの素晴らしさをいかして、あきのこない舞台とさせる。

今回本校においても、彼らのミュージカルそのものが発揮され、いろいろと工夫を凝らした衣装や演出などにより、ダイナミックでかつ軽快な響きが感じられた。また舞台との交わりもあって、場内全体が楽しい雰囲気に包まれ、われわれにとって満足できる芸術鑑賞教室であったといえる。

式典のあとに行なわれたため、気分転換には最適であったに違いない。その点も加わり、あの迫力ある舞台にはかなりの生徒が芸術としての音楽をじかに味わったのではないだろうか。本物の生の音楽に接したという潤いを持ってもいいことだし、少なくともそう感じたであろう。

熱気を帯びた中でさかんな拍手により幕を閉じたのは事実だが、鑑賞中に他人の迷惑も考えないで紙飛行機を飛ばしたり、無駄話をする生徒が多いことは考えるべき問題である。

## 砂の芸術展

恒例の砂の芸術が去る七月二十一日、晴天の中で無事行なわれた。今回は波にさらわれる作品もなく次のような結果となった。一位12HR「城」、二位23HR「長ぐつ」、三位35HR「城」、アイデア賞12・35HR、ダイナミック賞12HR、協力賞12HR、ショウガナイデ賞17HRであった。審査は一位から三位をアイデア度、ダイナミック度、協力度、計画性、できばえにより採点された。

来年は今年以上のすばらしい作品が見られるよう期待しよう。

## 遠州灘

▼吹き抜く[illegible]みる頃とな[illegible]目の前にし[illegible]も言えない[illegible]じる。「寒[illegible]で始まり、[illegible]一日が終[illegible]のだ。下校時、校舎に[illegible]うにスラリと並んでい[illegible]生徒。重苦しい校舎の[illegible]も倍に感じる。冷たい[illegible]となく吹けば当然へア[illegible]しかしこれから日が経[illegible]さらに寒さも厳しくな[illegible]も充分気をつけねばな[illegible]はNO・GOOD！▼[illegible]れて体育大会。去年は[illegible]期に継ぐ延期でついに[illegible]エル様のたたり（？）[illegible]ものだ。しかし今年は[illegible]れとも言える空の下で[illegible]今回は新しい意向のも[illegible]変ったが成果はどうだ[illegible]う少し見守りたいとこ[illegible]もそうだが、ほんとう[illegible]中心だとか、体育科が[illegible]に問題の焦点があるの[illegible]結局生徒全員の参加意[illegible]いるところにあるのだ[illegible]にやらせて、厳しく他[illegible]るという甘えた風潮が[illegible]る。甘えたという言葉[illegible]他人を批判するだけと[illegible]つめられた余裕のなさ[illegible]ろう。体育大会への不[illegible]いきたいものだ。▼演[illegible]を、少しずつとり入れ[illegible]術鑑賞教室を振り返っ[illegible]これらが設けられたの[illegible]うな理由がある。「本[illegible]自分自身に、何の自信[illegible]ない。そこで芸術を鑑[illegible]により生の芸術に接し[illegible]るという自信を付けさ[illegible]である。芸術を鑑賞す[illegible]って得るものは大きい[illegible]かし、どちらも鑑賞態[illegible]問題がある。鑑賞中に[illegible]無駄話をする。せっか[illegible]ける。得手勝手な行動[illegible]飛び散るなど全て鑑賞[illegible]パンフレットも紙飛行[illegible]われわれは御殿場や阿[illegible]練でいったい何を得て[illegible]うか。あの大自然の中[illegible]団生活の秩序はどうし[illegible]か。あくまで規律正し[illegible]活は、もう消えたのか[illegible]成果を日常生活にどの[illegible]入れるかは、ひとりひ[illegible]である。ここで考えた[illegible]生活をする上で、それ[illegible]かすかである。▼有意[illegible]もとにして、規律ある[illegible]するのは容易ではない[illegible]らかの形でそれらが表[illegible]いだろう。また少しで[illegible]向を示させば良いのだ[illegible]れもいっこうに示され[illegible]生にとって集団訓練の[illegible]にも生かされない状態[illegible]練の成果は学校生活に[illegible]そ、素晴らしいものと[illegible]われわれはそれに欠け[illegible]芸術鑑賞教室における[illegible]度は、当然団体生活の[illegible]るものである。▼三無[illegible]されている高校生活を[illegible]抵抗もなく歩むのでは[illegible]悲しい。その現状から[illegible]それを克服するには[illegible]いのだろうか。まず[illegible]おいて、自分自身の存[illegible]ることから始まるので[illegible]

レコード・楽器・ステレオ
ゴッドファーザー　爆発的売れゆき！
※サウンド トラック盤
※アンディ ウイリアムズ
※尾崎紀世彦唄
音のハイショップ　イケヤ
有楽街本店 52−5151　遠鉄名店ビル店 53−7814
かじ町店 53−5550・磐田店 2−8565・袋井店 2−2529

伝統と未来に伸びる
ショッピング
浜松　松菱

MOST DISTINGUISHED MEN'S SHOP · HAMAMATSU
Mr. Shop
COX
Estab.1958
浜松・静岡コックスグループ

ユニークな伝説の菓子　レイズン・クッキー　和風クッキー
波小僧太鼓　さんまるたん　あげ潮
ヨーロッパケーキの
まるたや
浜松市[illegible]大通96
TEL 52−1496 53−4708
松菱3F喫茶アントルメまるたや
葵町支店　西武店　遠鉄名店ビル

通学用
レジャー用　バッグなら
バッグショップ
ナカノ
浜松市鍛冶町87番地の1
TEL〈0534〉52−5049

**第八回文化展**

## 新企画を盛り込んで

### 人気を呼んだHR展・演芸会

九月二十三・二十四日の二日にわたり第八回文化展が行なわれた。今回は本校創立十周年を記念し、再出発を目的として、テーマを「もう十年？まだ十年？」とおいたが、テーマにそっていないものが少なからずあった。

今年は、新しく設けたチャリティーバザーをもふくめて内容がより豊かなものとなった。心配された天候もどうやらもち、ほぼ成功の形で終った。

今年度の文化展開催中は天候が心配されたが、われらの強い精神力が雲を消滅させたのか、成功のうちに無事終った。テーマは本校創立十周年にあたり〝もう十年、まだ十年〟とした。HR展・部展他に恒例のフィナーレや、今年度演芸会・招待試合・発表会などのから開始されたチャリティーバザーを含め内容が一層濃いものとなった。次は内容別の反省である。

▼HR展

文化展内で人気を呼んだ一つである。各クラスともそれぞれアイデアを生かした数々の力作を展示していた。人気はさておいて、今回の文化展は例年のように内容がテーマからはずれてはいないかということが問題となった。

▼HR展の審査

HR展の審査は、先生三名・各HRの代表一名の計二十八名と外来者によるアンケートで決定した審査結果は次のとおりである。

一位　三十六HR「トンネルをぬけるとそこは十年後だった」
二位　三十五HR「無題」
三位　十二HR「Ah！」

今回は、新しい試みとして外来者が審査基準に基づき、良かったHRをアンケート用紙に書いたものを審査内容に加え、いままで以上に正確な審査となったといえる。

▼部展

文化展の行事の一つとして例年どおり部展が行なわれ、各部とも一年間の活動の成果を披露した。見学者も進んで参加できるようにしたタイプ部などは、特に人気が高く好評であった。その他、火山活動やハム通信など熱心な展示を行なった部もあったが、全体的に見学者は少なく展示場内はひっそりとしていた。見学者も一室一室ゆっくり見ていく人は少なく、すぐに出ていく人が多かった。この点でもっとストレートに訴える要素が必要だったといえるだろう。

▼演芸会

演芸会は、二十三・四日の午前中に体育館で催され、たいへん人気を博した。同会はフォーク・ロックなどを趣味とする有志の演奏によるコンサートである。自作自演の曲、躍動的フィーリングを持った曲、「旅の宿」を一部引用した曲などを趣向を凝らして熱演し館内にぎっしり集まった聴衆をわかせ、中には大きな紙テープを投げる人もいた。出場者の演奏や司会の進行が、開放的で親しみやすく聴衆と一体化したものだった。同会が好評だったということは出場者の演芸会に対する熱意が伺われ、文化展そのものの雰囲気を盛り上げるのに役だった。また、スポットライトの効果も抜群で照明係の働きも特筆すべきであるが、会場を閉めきったために生じた暑苦しさは皆に不快感をあたえた。

▼招待試合

男女ハンドボール部が、二俣高校とグラウンドで行なった。晴天に恵まれ、好試合の末次のような結果となった。

女子ハンドボール
本校　5−2　二俣
男子ハンドボール
本校　8−9　二俣

▼チャリティーバザー

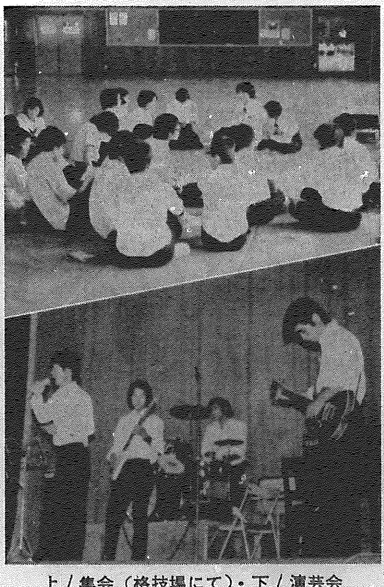
今回初めて行なわれ成功のうちに終った。収益三万八千十六円は静岡新聞社主催年末助け合い運動の「愛の都市訪問」に組み入れられた。

▼発表会

合唱部・器楽部・演劇部・創作ダンス部の日頃の練習の成果が発表され、なかでも創作ダンスは観衆の目をたのしませ素晴らしいものだった。

▼フィナーレ

フォークダンスが行なわれたが参加者が少なく、見ているだけの人もいてやや低調だった。本校生徒の積極性に欠けている一面がみられた。



上／集会（格技場にて）・下／演芸会

**演劇教室**

## 愛と死の記録

### 心に残る作品を

去る十月七日・浜松市民会館において第九回浜松高校演劇教室が行なわれた。

今回の演劇は「劇団民芸」による〝銀河鉄道の恋人たち〟が上演された。「劇団民芸」は、第二回〝夜明け前〟・第四回〝アンネの日記〟について今回で三回目となり演劇教室ではおなじみである。

本校は、第三回「文化座」による〝炎の人〟から参加し、今年で七回目である。

この演劇教室は、現在の学校での学習の限界を少しでも広げるため、有志の先生方の協力によって生まれ、参加二十六校、参加生徒約二万二千有余、年々拡充発展の一途を辿って開催することになった。

〝銀河鉄道の恋人たち〟は、劇作家の大橋喜一氏によって書かれたものである。これは、宮沢賢治作「銀河鉄道の夜」と、（幼い頃に被爆したひとりの青年が、二十四歳の若さで白血病のために死に、そのあとを追って一人の少女が自殺した）という実話をシナリオにした「愛と死の記録・広島の恋の物語」との二つの話をもとに創作したものだといわれている。

出演は、宇野重吉・樫山文枝さんなどの豪華メンバー。しかし、米倉斉加年さんが都合により出演できず、山本勝さんが代役として五郎役を演じた。そのため作者自身も初めて舞台に立つというエピソードもあった。

今回は、舞台装置・照明などがくふうされており、演劇をよりいっそう盛り上げ、会場を幻想的な雰囲気にさせた。

午後からは、大橋喜一氏を始めとする劇団側四人の出席者と約十校（約七十人）の生徒との間で座談会が開かれた。

会は、この劇のテーマともいえる「今日の世界状況中に於ける愛と生と死」を中心とした内容で、鈴木・田中（本校）の両先生の司会により行なわれた。意見・質問は多く出されたが生徒側が充分に理解して出席しなかったためまとまらなかった。大橋氏は、「劇についての捉え方は十人十色でいいけれども、心に残りまたいつか思い出してもらえれば光栄だ」と語っておられた。

今回の演劇教室について次のようなアンケートを生徒の一部の人達に行なった。

調査結果（一九七名中）

一、「銀河鉄道の恋人たち」を観劇してどう思ったか。
(1)よかった　49％
(2)まあまあ　43％
(3)よくなかった　8％

二、観劇態度について（個々）
(1)よかった　52％
(2)まあまあ　40％
(3)よくなかった　8％

三、劇の内容についての理解
(1)よく理解できた　19％
(2)ほぼ理解できた　60％
(3)理解できなかった　21％

なお次のような意見もあげられた。

○舞台装置・照明がよかった。
○二つの話を一つにしたので少し変な感じがした。
○戦争反対の思想が主張されすぎてムードがこわされた。

反省としては、一部の前半の観劇態度が悪すぎたという声があげられた。

演劇の数日前に配られたパンフレットの活用度は、あまり好ましくないようであったが、事後における創造的活動を大切にし、観劇後の研究活動をもっと充実させるための第一歩として活用したいものだ。観劇の感動を定着させ、血肉化するための活動として、HR討論・座談会などに活用し、観劇マナーを守って、これからの演劇教室を充実したものにしたい。

**取材日記**

## お願い答えて！

某月某日、重いテープレコーダーを持って放課後の校内をさまよい歩く。多くの人にインタビューに応じてもらったのだが、答え方にもいろいろなタイプがあるノダ。

一、やだよー　—男に多いー
二、エー　放送するの？　（いいえちがいます。新聞部です）それなら話してやる。—この手の人が、わりあい多いー
三、はい　僕が思いますには……　—すばらしい人でありますー
四、ウルサイ！　答えてなんかやらん。—こういう人はいませんでしたー

いろいろな人がおりましたがインタビューするには、たいへんな苦労が伴いまして、こちらも神経がスリ減るのでありマス。

某月某日、張り切ってインタビューに出かける。何の苦労もなく数人の女子を発見。私達の恐しい姿（？）を見て、逃げられてはいけないと思い、ぬき足さし足、かつ急ぎ足で彼女たちに近づく。

「新聞部ですけど、インタビューに応じてくれませんか？」と少し気取って言うと、「いやなら答えなくてもいいんですね」と彼女。ああ！甘かった。何とやぼな聞き方をしたものだ！

某月某日、生徒の声の取材にA先生の所へ行く。さて、インタビュー開始。先生は動いているテープレコーダーを見ながら「録音していないだろうな」と念を押し、三十秒の質問に三分以上かけて、積極的、また非常ににこやかに返答してくださった。

「ではこの辺で」と言おうとすると、相棒が又質問を始めた。

「とことんまで追求せよ」このように先輩に言われた彼は、さらに質問を続ける。

日は暮れて、あたりはしだいに暗くなり、冷たい風が吹きつけて、身にしみる。いったいいつになったら終わるのだろうか？

## 歴史と風土への理解

### 海外へ旅して

この夏休みに、西欧八カ国（イタリア、バチカン、スイス、フランス、西ドイツ、ベルギー、オランダ、イギリス）と、往復の途中タイやエジプトに立寄り、あわせて十七日間の旅をしてきた。全国地理教育研究会のヨーロッパ研修旅行に、倉見先生とともに参加したのである。

まず、出発に先立ち、次の点を見学のポイントとしてまとめてみた。

一、大筋としては、「風土」の考察ということ。和辻氏の考えによれば、ヨーロッパ的なるもの、即ち牧場的風土と、乾燥アフリカの砂漠的風土を、この目でしっかり確かめること。なお、当初の予定になかったタイ国を訪ねることになったので、思いがけず、熱帯アジアのそれにも接することができたのは、幸運であった。

二、ヨーロッパ大陸の国境、中でもEC（ヨーロッパ共同体）域内での実情。

三、宗教、とくにキリスト教と人間生活とのかかわり。

まず、タイ国では、メナム川に続く水路のバンコクヤイ運河に入り、暑熱多雨地における水と人間生活の関係の一端を見ることができた。水路沿いのみすぼらしい家に住む人たちは、飲料水には雨水を使うようだが、濁った河水で洗濯したり、髪を洗ったりしている。水路には、毎朝、野菜や果物などを積んだ小舟（サンパン）が集まり水上マーケットが開かれる。賑わいの中にも素朴さを残した都市の様子を見学できたことは、一つの収穫であった。

羽田から約一万六千キロ、正味十九時間の飛行で、ローマのレオナルド・ダ・ビンチ空港に降り立ち、われわれはヨーロッパへの第一歩を印した。イタリアは、日本との時間差七時間。スイスなど他の西欧大陸諸国と日本との間には八時間の時差がある。イギリスも夏時間で同じ。

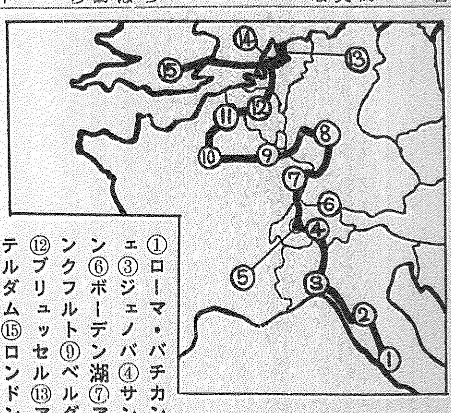
ローマは、緯度的にみれば、函館とほぼ同じだが、八月半ばの日中の気温は、摂氏三十度を上廻る。しかし、湿度は五十八％程度で乾燥しているから、日陰ではさわやかだ。ここから北へ緯度差で約十度、北緯五十二度のオランダ中部まで、雪のアルプス・サンタゴール峠越え。また、アムステルダム郊外ボーレンダム港の夕暮れ時には肌寒さを感ずるなど、ヨーロッパ大陸を縦貫して、大きな気候的変化を体験することができた。

イタリアでは、D（西ドイツ）NL（オランダ）などの記号をつけた自動車を多く見かけたが、夏の短い北寄りの国々の人たちにとって、太陽を求め南欧へ出かけることは、バカンスを楽しむというより、健康を維持していくうえでの生活上の必要さ、とみたほうがよいであろう。

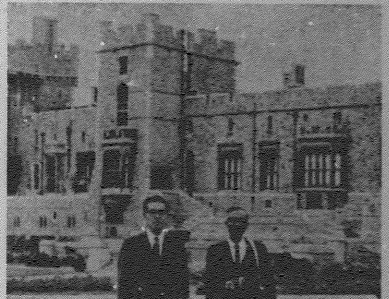
陸続きの国境を通過することは私たちにとって、大きな関心事の一つであった。ヨーロッパ大陸で六回にわたり国境を通ったが、パスポートの提示を要求されたのは西ドイツからフランスへ入国する時だけで、あとはバスの運転手が検問所へ出向いて簡単な手続きをするだけ。その間、二〜三十分待たされる程度であった。フランスのアルザスから西ドイツへ入る際の国境はライン川だが、そこにかかる橋を、人々が気軽に往来している。この地方は、かつて独仏係争の地だったが、バスはいつの間にか国境を通過した。平和の有難さを感じた一時であった。しかし、EC域内でさえ、通貨が国境を越すたびに変わるのには閉口した。リラ、フラン、マルク……等。国境通過が全くフリーのベルギーとオランダ間でも、ベルギーフランとギルダーというように違っている。言語についても、決して一様ではない。ベルギーの場合、共通語ではなく、ブリュッセルをワロン語ではBRUXELLESとつづり、フレミッシュ語ではBRUSSELと書く。

宗教に関しては、行きずりの旅行者に深く理解できるわけのものでもなかったが、数々の寺院を訪ねてみて、ヨーロッパ文化を支える大きな柱の一つが、ヘブライズムであることを、再認識した。サン・ピエトロ寺でも、パリのノートルダム寺でも、観光客にかまうことなく敬虔な祈りを捧げている人たちを見たし、小さな田舎町へ行っても、町の中央にそびえ立つ教会の塔は、一際目立った存在であった。

最後に、国際的な視野の拡大とか、国際理解を深めるということは、実際に外国の土地を踏み、外国人と接することによって、一層増大するものであるということを、このたびの旅行を通じて強く感じた次第である。



①ローマ・バチカン市国②フィレンツェ③ジェノバ④サンタゴール峠⑤ベルン⑥ボーデン湖⑦アルザス地方⑧フランクフルト⑨ベルダン⑩パリ⑪リール⑫ブリュッセル⑬アイセル湖⑭アムステルダム⑮ロンドン・ウインザー



イギリスの歴史をきざむウインザー城をバックに　山田・倉見の両先生

**《生徒の声》**

## 楽しい体育大会に

### 新しい形を目指して

体育大会のようすについては一面に詳しく述べられているが、ここでは直接インタビューして得た生徒の体育大会に対する声を載せることにした。それらを大別するとおよそ次の三点になる。

一、陸上部の陸上種目への参加についての意見や感想
二、企画運営に対する意見や感想
三、体育大会の内容に対する感想と具体的意見

**もっと盛り上げよう**

まず、一番目の陸上部の参加については、記録大会のような感じがしたという人が多かった。一年男子の陸上部員は、体育大会であって陸上大会ではないのだから個人的にHRの代表として出てもかまわないではないか、陸上部とは関係なく考えるべきだとしている。

陸上部が参加した場合体育大会は陸上種目が中心であるので、陸上部員の多いHRは有利となり、そうでないHRはおもしろくなくなって全体として盛り上がらない状態になってしまう。

ある一年の男子は陸上部が出たほうが盛り上がっていいと陸上部の参加に肯定的な答えをしているが、前述の理由で反対する人のほうが多い。具体的な解決策として三年の男子からは、陸上部はリレーだけに出ればいいという意見、生徒会長からはレクリエーション種目とか応援にも点数をかけて陸上の才能のない人でもやる気が出るようにすべきだという意見、二年の女子の陸上部マネージャーからは陸上部以外の人が複数の（陸上）種目に出ればいいという意見がそれぞれ出された。

**楽しめる種目を**

二番目の企画運営に対する意見感想としては、レクリエーション種目を増したり仮装行列をみんなでやったりして、たくさんの人が楽しく参加できるようにしてもらいたい、というのが最も多く、さらに男女混合の種目があったらもっと楽しくなるのではないかと言う人もいた。さらに関連して三年の男子の二人は企画運営の中心は体育科だけでなく、生徒会本部も一緒にやってほしかったと言っている。このことについて体育科の先生は次のように言っておられる。

本校生徒のスポーツテストの結果を見るとひじょうに体力がないことがわかるが、この体育大会を基礎として基礎体力の向上に努力してもらいたいと思う。それにはこの会をいままでのようなただの祭典行事に終わらせることなく、しっかりとけじめのついた会にすることが必要である。そのために主催は体育科としたのであるが、内容については本部とも相談して決めたものであり、強制する気はまったくない。

また、他の三年男子からは、例年のクラブ対抗リレーがなかったので残念だという感想が聞かれた前述の陸上部の二人は、役員をもっと増して陸上部の負担を減らしてほしいと言っている。

**まずは成功か**

三番目の内容に対する感想と具体的な意見はひじょうに多かった。感想としては、おもしろくなかったと答えたのが三年女子の一人だけで、ある三年の男子は一年のときにくらべればかなり楽しかったと答え、二年生は初めてできたのでうれしかったと答えていた。特に強い不満を持っている人はほとんどいなかった。

今回の体育大会は企画運営が主に体育科であったためか、一昨年までのようなだらだらとした状態がなくなり、多数の人に充実感を与えたものと考えられる。

次に意見としては、生徒会長は先生がもっと競技に参加して生徒との交流を深めるために努力してほしかったと言っている。二番目のことにも関連して、応援をもっと盛んにとか、音楽を流して楽しい雰囲気をつくってほしかったというような、リラックスした楽しさを求める声が強かった。さらに、体力づくりのためというが、それなら授業でできるではないか年に一度のこの行事がなぜ祭典であってはいけないのかと言う人もいた。

体育科の先生はこのことに対して、体育大会は授業のうちとしてやっているのであり、個人の練習の成果を発表する場であってレクレーションの場を目指しているのではない。と言っておられる。この点については数年前から不満の声が出ており、体育科に主催が移ったから問題になったというわけではない。これからは生徒の意見と体育科の意向とを両立させることが問題となりそうだ。

今回は突然インタビューしたため、答える方も深い思考ができずやや無責任に答えてしまったかもしれないが、ほとんどの人が積極的に応じてくれた。生徒は学校のことに無関心ではなく、ただ気楽に自分の意見を話せる場がないだけなのでは、と思った。

## 職員室だより

ぼつぼつ窓辺の陽だまりが恋しくなり始めた十月のある日のことであった。職員室から南館のいっかくを見つめていた倉見先生がしばらくして「すずめの雌雄はどうして見わけるのだったかな」と近くの先生に話しかけてきた。目の回りの黒が広いのが雌ではないか、いや丸く大きいのが雌では等と様々な論議の末、大下先生の「昔は区別がついたんだが近頃は人間だって区別がつかないんだから、すずめはとても無理だね」でチョン、いやチョン。

昨今植木が世の中のブームになっているということだが、南高校の職員室にもそんな風が吹き込んで来た。「おさな木会」の発足がそれだ。①植物を育てることを愛し②一年に一・二回作品を発表し③同好の人たちに分ち④より私たちの生活に潤いを与えるのがねらいだということで倉見先生を会長に西原・栗田・内山・野坂先生ら十五名の会員で十月十三日に発足した。第一回の発表会は来年の三月でチューリップとアネモネの花が展示されるそうだ。さて、どんな花が咲くことやら。

二年のある除草日にグラウンドに青大将がはぐれ出て来た。冬ごもりに遅刻したのかダウンす前。それが野島先生が率いる26HRの区域であった。先生は皆にひやかされて「コワイ、コワイ」の連発だったそうだ。せめて〝おひい様〟たちに認められたのがおなぐさめか。

## 赤ちゃん誕生

この五カ月の間に五人の先生方に次々とかわいい赤ちゃんが誕生した。どの先生も喜びいっぱいの顔を隠しきれないようすである。以下は赤ちゃんの簡単なプロフィールと各先生の御子息、御息女誕生にあたっての弁。

▼浄閑先生には六月二十九日、長男祐君が誕生。体重三・七kg「下宿のおばさんの子である。そのうち自分の子供の母にするよ。」

▼伊藤秀子先生は八月二十九日、次女佳奈ちゃんをご出産。体重三・一五kg「今度こそ男の子だと思ったんだけど。また女の子で名前をつけるのに困った。」

▼伊藤武雄先生には長男として十月十二日、史和君が誕生。体重二・七kg「子供一男一女の理想的標準家庭となった。生まれる前に母親に石坂浩二の写真を見せておいたのがよかった。」

▼松下先生は伊藤秀子先生と同様に男の子を期待していたが十月三十日、次女幸ちゃんが誕生。体重三・〇kg「一姫二太郎ではなく一太郎二姫になって残念。」

▼「僕の兄弟の子供は男ばかり。これがどこまで続くか楽しみ。」という中村宏先生に今月九日、次男が生まれた。十一日現在では名前は未決定。体重二・九kg

寒さも一段と厳しくなるが、元気に育ってもらいたい。

## 編集後記

南高創立から十年。我南高新聞部もこれで十歳というわけです。

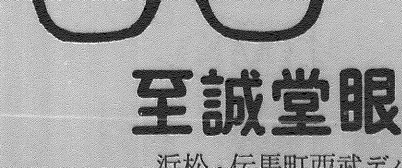
この十年の間には、いろいろな困難がありました。そして多くの先輩たちは、それらを乗り越えてきたのです。

そうした先輩たちのおかげで、ここに浜南高新聞第35号を発行することができました。

この35号は一・二年生だけで編集した最初の新聞ということで、やや不完全な点もあります。もし気づいた点がありましたら部員に言ってください。より良い新聞製作の参考にしたいと思います。

正しい視力で明るい学園生活を！
美術・スポーツ・読書の秋!!
視力が大活躍する時
君の視力は正しいか、
い……年に１度は視力チェックを受けましょう。
安心堂のメガネ
ANSHINDO
浜松市田町13の3 (54)7555

ふれあうショッピング
夜8時迄営業
浜松ショッピングデパート
ニチイ
浜松モール街
TEL(54) 2271



メガネで生かそう
あなたの魅力！
至誠堂眼鏡店
浜松・伝馬町西武デパート西側
TEL 52－6219

ビートルズ
in YAMAHA '72
12/2（土） 12/3（日） /4Fホール
内容
ビートルズ未公開フィルム上映
ビートルズレコード
リクエスト DJ大会
ゲスト（武蔵野タンポポ団の若林純夫）
2日 上映時間
PM 1:00
PM 3:30
PM 6:00
3日 上映時間
PM 5:30
PM 7:00
その他バッチリ
君に合った企画が
一杯なのだ!!
整理券は日本楽器浜松店で配布中
日本楽器 浜松店
◎浜松市鍛冶町122 ☎（0534）54-4111